

---

# 裏生徒会執行部！！

リオ・レウス

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

裏生徒会執行部！！

### 【Zコード】

Z2077E

### 【作者名】

リオ・レウス

### 【あらすじ】

日々活動を続ける裏生徒会執行部。生徒の不満を静める仕事をする彼らは時として教師にも牙をむく！調査を進める執行部メンバーの前に新任教師の過去が明らかになる！

## 第1話

4時間目、音楽。

音楽はいけすかねえ。

何がヤダって？すべてが、だ。

別に楽器を奏でるのが嫌いなワケじやない。  
歌うのもそんなんにキライじやない。

あえて言おう。

原因は、先生だ。

どうも俺とは価値観がちげ〜

とにかくダメなわけだ。

それに……

音楽の用意すべて忘れましたあ。

これで… 64回連続…！

記録更新ですな。

またあの怒声に頭をぶち抜かれるワケだがまあいい。

女の先生だから怖くない

といつ！」とで音楽は俺の思つがままなのだ！

ハツハツハ！

キンゴンカンゴン...

キタア！ チヤイム！

## これから死闘が始まる：

チャイムが鳴り終わると同時に音楽室のドアが音を立てて開く。

「はい、おはよう。授業始めます。」

来たな BBB め

お前の説教、しかば止めてやる！

自分にそう言い聞かせて、勇気を奮い立たす。

『全員、戦闘配備！これより俺はBBBBとの抗戦に入る！』

俺の中の細胞すべてがB B Bとの交戦に備えた。  
バッドプレスパパ

今だ。宣戦布告！！！

「せんせー、音楽の用意ぜーんぶ忘れましたあ」

俺は元気よく宣戦布告を述べた。

「また忘れかよ加山一。リズム感は卓球にも必要だろ～！？」

周りのクラスメイトが揚げ足をとる。

よけいなお世話だ！音楽なんて消えちまえ！部活動は関係ないだろ  
うが！！

二

心の中で愚痴りながらも BBB の反撃に備えて耳をふさぐ。  
今日はついでに目もつぶってやろう。  
パッドブレスババア  
BBB への挑発もかねて、目もつむった。

1

あれ？ 何も聞こえないぞ？

「！」

なんじゅ一せこひー

目の前にいたのはBBBBではなかつた。

そこにいたのは……妙に威圧感のある男。

「だ、誰だテメエ！！」

俺はすっかり気が動転、おもわず荒い口調で叫んでしまった。

「新任の矢崎だ。ようじへ

「ハアアアー！？」

「マジか？まじか？マジですか？？」

俺の中の音楽の授業が音を立てて崩れ落ちた。

キーンコーンカーンコーン…

授業の終わりのチャイムがなつた。

…やつと終わつた…

音楽室から出た瞬間、大きなため息がもれた。

もう最悪。今までうけてきた授業の中で一番最悪。

あの矢崎とかいう教師、ホントに教員免許もつてんのか？？

てか、あれはホントに授業なのか？  
ほぼ雑談じゃねーか。

いきなり楽譜を配つて、この音符はオタマジャクシに見えるだの、

この音符はピアノのけん盤だの、しまいには自分が若かつた頃の自  
慢話。

論  
註

つたく、あんな授業つまんねえ！！

ふざけんのも大概にしろ！！

田中 以上にむかへく

モードルナヤハシカホ

でもこんな事、口が裂けても言えねえ。

雰囲気がまるでヤクザだもん。

俺は階段を一気に駆け上がった。  
腹いせに、午後の授業は屋上でやつてもいいやつだ。

屋上に続くドアを蹴り飛ばして開ける。

「こんにちわ、 加山君。」

ドアが開いたと同時に男性の声が耳に飛び込んできた。

いきなり名前を呼ばれた俺は一瞬とまどった。

だとしたら、この声の主はだれだ？

そこには眼鏡をかけた男子生徒がいた。

歳は……俺よりも上だらうか？下ではなさそりだ。

「初めまして加山君。そしてよしこそ裏生徒会執行部へ。」

メガネの生徒が改まつた口調で言つた。

裏……生徒会！？

## 第1話（後書き）

裏生徒会執行部とはいつたい何なのか??

第一話に続く!!

裏生徒会?  
なんだよそれ…

よく見ると眼鏡の生徒の後ろにも何人かの生徒が控えている。  
性別は分からぬが、4人ぐらいだろうか。

「君は新任の矢崎に不満を抱いている、そうだな?」

眼鏡の生徒がいきなり切り出した。

隣には起動しているノートパソコンが開かれていた。

「！…？？」

なんか腹立つな、この眼鏡。

それがなんだってんだ。

するとメガネの後ろから長身の男子生徒が出てきた。  
キリッとした顔立ちが印象的な生徒だ。  
でもやっぱ怪しいだろ、コイツら。

「そんな顔をするな。僕たち裏生徒会執行部は一種のサークルとと  
らえてもらつて構わない。活動内容は主に生徒達の不満を静める事  
をしている。」

メガネは分からぬが、この男子生徒の学生服についているネーム  
プレートには『赤西亮』<sup>あかにしうりょう</sup> という名前が刻んであつた。

それにしても…静める…どういふ意味だ?

…静めるって、どうやって静めるんだ?

そもそも裏生徒会執行部など聞いたことがない。

一体こいつらは何者なんだ?

「一言でも言つてやう。」

野太い声。

赤西の背後から不良のよつたな金髪の男子生徒が出てきた。

「！」の赤西さんがテメーの不満をはらしてやうつて話だ。分かるか?「

ケンカ口調でいきなり話しかけるモンだから、思わずむつとしてしまう。

ギタギタにしてやうか?

「うひうひ、密は一重に扱えと言つてこらだらう。」

ぴりぴりした空気を感じ取つた赤西<sup>コイツ</sup>がとつとつとさめた。しつかりしてゐるな赤西。

「で、何か質問はあるかな?」

赤西が仕切り直す。

……質問で、

「まあお前ら何もんだ?まあ名を名のれよ。失礼だろが。」

皮肉モード全開！！

金髪ヤローが顔をしかめた。

ハツハツハ！参ったか金髪ヤロー！！

心の中でいっぽいののしつてみた。

「失礼。僕の名前は赤西亮だ。」

赤西が紹介を始めた。

そんなの知つてるし！

「そしてこの眼鏡が飯田。眼鏡とでも呼んでくれ。」

眼鏡いいだが赤西をにらみつけた。

ぎらりと光が眼鏡のレンズに反射した。

が、赤西は飯田のにらみを無視して紹介を続ける。

「で、こいつの金髪が高見裕也。あだ名はキンチャン、だ。」

高見は俺のことをぎらりとにらんでいる。

調子こきやがつて。  
にらみ殺すぞ？

「で、最後にこの女の子が中村さん。」

見かけは相当カワイイ。  
ヤツベ惚れたかも…

俺が見とれていると中村が口を開いた。

「何見てんのよ。アンタの家に盗みに入るわよー?」

怖  
！  
！

怖いよ中村さん！！

守人の見ごよ。

ヤバそうだよ。殺氣を出しちゃう。

「ちなみに中村さんはピッキングのプロだよ。気をつけてね。」

えええ  
まじかよ。

ホントに家に盗みに来るかもしけねーじゃん  
コワーーーー

「さて本題に戻ろう。もう一度確認をする。君は新任の矢崎に不満を持つているね？」

「ああ。でもそんな不満静めようがないだろ？知つたとこでいい  
しようと云うんだ？」

確かに俺は矢崎に不満を持っている。でもそんなの認めるしかない

全部受け入れるしかないじゃん？

それ以外の道なんてない。

実現不可能。

あんたがりの出る幕はないつかねーのー！

「それだけ確認できればダイジョブだ。期待していくくれ。」

そつ言い残して赤西達は屋上から出て行つた。

.....

一気に屋上に静寂が戻つた。

前に来たとき（前にすねてここへ来た時）と同じよつに。  
落ち着くなあ。

.....なんだつたんだる....アレ....

## 第2話（後書き）

なんか個性的な集団だが、ダイジョブなのかー!?  
一体何をする事やら……

朝。 みんな 皆、 教室に入るとクラスメイトの視線が俺に集中した。 何か言いたそうな顔をしている。

城田がかけてきた。

いわゆる親友といふやうだらうか、ハヤシと並んで、おぐやにいる。  
しかし、なんだこの満面の笑みは…

## 城田らしく 嫌な予感…

「すげえぞお前。やるな！」

「何が！？何がだよ！？」

「おお、お前マジですかー。」

だから何が！？落ち着けよ！」

なんだこの興奮ぶりは！

「中村さん知ってるだろ？中村さんがさ…」

ん？中村？誰だ？それ

「ちょっと待った。中村って誰だ？」

「えええ… 中村さん知らないのかよ…」

城田が中村の説明をし始めた。

とんたに語りしんたよ  
話の内容はこんな感じ。

中村八唯。  
なかむらやゆい

3年2組の女子生徒で、学年一の美女（？）らしい。なんかかなりファンがいるらしいへ、（ちょっとひく～）女子の間でもあこがれの的らしい。

そんなの今の今まで知らなかつたよ、俺。  
誰か教えてくれたつてよかつたじやん。

「でも、その中村さんが朝、このクラスに来たんだよ。」

151  
h.

だからなに？みたいな？

このクラスは3年5組でソイツのクラスとは離れてねにども  
めずらしい事じやなくね??

「で、お前の机の上に手紙をおいてつた。」

「？」

「お前に手紙を渡してくれって。ハイ、これ」

.....

城田は手紙を差し出した。

なんかかなり渡したくなさそうな顔…そしてついでまじめな目。  
こりゃホンモノだな…

俺は手紙を開けた。

クラスメイトの視線が重い。

えっと、何々…

加山へ

加山、打ち合わせがあるから今日の朝、アタシの教室にきな。  
なるべく早く来てね。

裏執行部…中村より

.....  
あれ？

中村つて…裏生徒会執行部の…?

あのピッキングの天才とかいう女子生徒の…?

あの中村か…?  
まじかよ！

喜んでいいの！？

これ喜んでいいのかね？

正直……

メッチャカワイイ！！

まあいいや。

とにかく行ってみよう。

えっと何組だっけ？？

城田にそれだけ確認して俺は教室を出た。  
クラスメイト皆がしきりに騒ぎ立てるが無視。

俺は急いでんだ。

授業がはじまっちゃう。

3組の教室の前を通過した頃、授業の開始チャイムがなった。  
結構遠いんだよね、2組つて……

あの角を曲がれば2組の教室。

角を曲がった。

と同時に中村の姿が視界に入る。

やべ、改めてみるとカワイイ。

「遅い！授業始まっちゃったじゃないのーー！」

なんか屋上の時と雰囲気違つた。  
惚れたかも。

「とにかく屋上行きましょ。」

中村は強引に俺の腕をつかんで引っ張つた。  
すげえ力。  
腕折れそう…

「早く…」

言葉には茶目っ気があって和むが、田は殺気にあふれている。

「ええ…

そのまま俺は屋上まで連行された。

屋上。

一時間田終了のチャイムがなつた。

俺が屋上に着いた時には前回のメンツがそろつっていた。  
飯田がなにやらパソコンをいじっている。

「何がつかめた?」

中村が赤西に聞いた。

「それが、何も分からんんだ。でも何もつかめないトコがまた怪しい。」

赤西が不満そうに言った。

「一体裏生徒会執行部は何をやつてるんだ!?」

赤西は俺の疑問に気づいたのか、説明してくれた。

「矢崎の過去について洗ってるんだよ。」

「え?」

.....

マジこいつら何者??

まるでどつかの特殊部隊だね...

「あつた！発見したぞ！矢崎の過去…」

いきなり飯田<sup>めがね</sup>が叫んだ。

半分寝ていた俺はビクッとして起きあがる。  
何時間ぐらいたつただろうか？  
かなりの時間、ここにいたような気がする。

「何が分かつたんだ？」

赤西が瞬時に飛んできて聞いた。

アンタ起きてたのか…  
すげえな…

「矢崎の過去です。矢崎は6年前に整形しています…」

「なに…？」

だからなんだつてんだよ…  
べつにいいだろ。

大体過去なんて洗つてどうすんだよ。

「よし、じゃあ矢崎はなぜ整形したのか、調べてくれ。」

赤西が早口で飯田<sup>めがね</sup>にそう指示した。

だからなんで過去??  
もういや聞こいつ。

「何で過去なんてしらべんだよ?意味なくね?」

「過去を調べれば、相手がどういう人間なのか分かる。これから戦う相手は知る必要があるだろ。それだけだ。」

俺は赤西の単純明快な返答に納得した。  
相手の弱みを握るワケか…

……とその時、いきなり校内放送が入った。

『え~今から呼び出す生徒は今すぐ職員室まで来なさい。』

この声…矢崎じゃねえか。

『中村、加山、高見、今すぐ職員室まで来なさい。』

おれ??

ヤバ!授業さぼりすぎたんだ!!

思えば、もう3時間田の中盤あたりだろう。

「今日はお開きだ。皆、各教室に戻れ。」

赤西が早口に指示して足早に下の階に歩いていった。  
それに続き飯田<sup>めがね</sup>が後を追う。

高見も一回舌打ちをして機嫌悪そうに歩いていった。

俺と中村が残つた。

中村は立ち止まつて俺の方を振り向いた。

「行くわよ。せんこう先生の巣窟へ。」

はは、つまんねえジョークだ。

俺は苦笑を浮かべながらも中村の後にくつついていった。

職員室。

先に高見が来ていた。

高見の前には矢崎。

お互ににこらみ合つてゐる。

そこでは静かなる激闘が繰り広げられていた。

「お前ら今まで何やつていたんだ！」

俺と中村が視界に入つた瞬間、矢崎は怒鳴り声を上げた。

あれ？思つてたより迫力ないな。

こんなもんかよ。

「授業を4時間もサボるヤツがあるか！特にお前！」

矢崎は高見を指さした。

「お前らは帰つてよし。」

俺と中村にそつと来て矢崎は高見をつかんだ。

「ちよっと来い、高見。」

矢崎は高見をつかんでドアを思い切り開けた。

「んだよテメー！」

高見はキレてドアを蹴飛ばした。

しかし、矢崎は高見を引っ張り連れて行ってしまった。

ハハツ

いいぞまだ。

ワルぶるからイケナイのだよタカちゃん！

心の中で高見を小馬鹿にして、俺は職員室を出た。

職員室を出るなり、いきなり中村が俺をつかんだ。

「怪しまれなこよにアタシとアンタは付き合ってこないといふよ。

「へ？」

「物わかりの悪い男ね。まあそつこつことだから。じゃあね。」

中村はそつ言い残して自分の教室に向かって走つていった。

付き合つ...

俺が...ね...

まああの田はまだ殺氣残つてたし、本気でせき合ひはじやないだろ。  
フヨイクの付き合いか…

ヤベ、なんかスパイ映画みたい。  
乗ってきたぜイ!!!

夕方。

時刻は6：00。

もう空は薄暗く、校庭では運動部が片づけをしている。

そんな中、3・1の教室には一人の生徒がいた。

その生徒は校内にもかかわらず堂々とノートパソコンを広げている。

飯田雄太。

通称メガネ。

裏生徒会執行部の参謀ともいえる人物。

今回、<sup>メガネ</sup>飯田は加山とかいう奴の依頼で教師の経験を洗つていて。飯田が下調べをしたうえで、<sup>キンチヤン</sup>高見や赤西さんが行動に移す。最終的には目標を震え上がらせればいいだけ。

しかしそれらの行動を実行するには入念な下調べが必要。だからこの仕事はかなり重要なになってくる。

そして今回の獲物は…

新任の教師、矢崎。

コイツは6年前、整形をしている。  
なぜだ？

飯田の頭にはその疑問がずっとつきまとっていた。

まあそんなことを考へてもしようがない。

今は田の前にある事を一つ一つかたずけていくだけだ。

しかし飯田は正直、その理由にたどり着く自信があった。  
最終的にはその答えにたどり着けるだろう。

この件はおもしろいことになりそうな予感がする。

キーボードをたたく手に汗がにじむ。

ペーぺーぺーぺーぺー

パソコンから電子音がなった。

よっしゃ、bingo。

画面に出でてきたのは顔写真と経歴が載つて居るリスト。  
6年前に整形した客のリストだ。

飯田は素早くリストをスクロールする。

この中に矢崎がいるハズだ。

飯田は高鳴る鼓動を抑えながら一つ一つリストを見ていった。

「...」

ふと飯田は一人の客のページで動きを止めた。

画面に映つた顔写真。

矢崎の面影が見て取れる。

おそらくこの人物が矢崎の整形前の顔だらう。

経歴の詳細についても一応見てみたが、どうやら矢崎のそれと一致する。

コイツが6年前の矢崎…

しかしその客の名前の蘭には違つ名前があった。

小岩浩一。

矢崎じゃない。

まあいい。たぶんコイツが矢崎の正体だ。

矢崎は偽名だらう。

小岩浩一。今度はコイツを調べるか。  
どんな過去が出てくるか…

もうひと調べにこりと意気込んだがもう時間だ。  
時計は6：40を指していた。

後は家に帰つてからにするか…

飯田はパソコンをバックにしまつと立ち上がり教室を出た。

## 第5話（後書き）

次回、思わぬ展開へ！  
高見に危機迫る！？

昼頃。

各教室は給食の時間で生徒の声が騒がしい。

そんな中、高見は新任の矢崎に連行されていた。  
何度か矢崎の手を振り払おうとしたが矢崎の手はなぜか離れない。<sup>コイツ</sup>  
かなりの力だ。

しうるがない、高見は矢崎に聞こえるように悪態をつきながら引つ  
張られるしかなかつた。

「んのヤロ… オイ、どこにつれてく氣だ？」

高見は強氣で聞いた。

二人は今、3階に続く階段をのぼつていた。

どこへ行くか、全く見当がつかない。

しかし、矢崎は高見の問い合わせに對してなんの反応も見せない。  
ただただ無言で階段を上る。

おかしい…

なんだこの違和感は…

高見はこのとき矢崎から違和感を感じ取つていた。

何も確証があるわけではないが、嫌な予感がしていった。

ついに3階に来た。

ここまで来ると、教室からもれてくる生徒の声も聞こえない。妙な静けさが一人を包む。

歩く方向からしてどうやら音楽室に向かっているようだ。

しかし、音楽室にいつてなにをするんだ？

説教なら職員室でやつてもよかつたハズだ。

高見はだんだん不安になってきた。

「オイ、どこ行くのかって聞いてんだよ！聞こえネエのか？」

しかし、相変わらず矢崎は無表情で何も答えない。

……なんか、気味が悪い。

矢崎はそのまま高見の手を引いて音楽室のドアを勢いよく開けた。しかし、彼はそこで止まらず、音楽室のさらに奥の準備室に入った。

入るが否や、矢崎は準備室のドアを勢いよく閉め、鍵をかけた。

「さて、お仕置きの時間だ。」

矢崎は低い声でそう言つと着ているジャージのポケットから銀色の物体を取り出した。

白く光る物体。

ナイフ。

矢崎は狂った笑みを浮かべナイフをなめた。

矢崎コイツついに狂いやがつたか？

高見は苦笑を浮かべながら矢崎に殴りかかった。

6・50。

飯田は小岩浩一なる人物の過去を調べていた。  
どこかで聞いたような名前だ…

検索はものの15秒程度ですんだ。  
何しろ条件が絞られている。  
妥当な時間だろ？

画面に映つた検索結果を見た瞬間、飯田の顔色が変わった。  
コイツは…コイツは指名手配中の犯罪者じゃないか…！

さうに飯田は驚きで一瞬動きが止まった。

しかも小岩コイツが起こした事件…

下の方にある、その人物についての備考欄。

犯行内容：6年前、高見家に侵入、高見涼子を殺害。

動機は涼子の夫、和志への恨みが原因と見られる。

高見和志は暴力団の幹部で小岩との面識もあつたようだ。

涼子を殺害後、小岩はその場を逃げた。  
逃げた時の、目撃情報もあつた。

そして最後の文にはこう書かれていた。

【小岩は未だに逃走中。目撃情報も出ないため、整形あるいは国外へ逃亡したものと思われる。】

なんてこつた！

矢崎は殺人犯だ！

高見が危ない！！

たしか高見はあの後、矢崎にどこかへ連れて行かれた。

6年前の事件の被害者である高見涼子。

そして、その子供は高見だ。

矢崎の正体を知つたら、高見は何をするか分からぬ。

とにかく助けにいかなくては！

飯田は急いで赤西に電話をかけ事情を説明<sup>ざいじょう</sup>し、急いで家を飛び出した。

## 第6話（後書き）

次回・勢いよく家を飛び出した飯田。果たしてどうなるのか！？

もう外は暗い。

でも冬に比べて、ずいぶん日が落ちるのが遅くなつた。

かすかだが下の階から夕飯のにおいがする。

さて、夕食の前に少し勉強でもするか。

加山は机に向かい英語のノートを開く。

そういうや俺達が職員室に呼ばれた後、高見が矢崎アヤツキに連行されてたけど…

結局あの後どうなつたんだ？  
もしや気付かれたか？

「…………」

なんかいろいろ考えてたら頭痛くなつてきた。

…そうだ、気分転換にコンビニにでも行ってくつか。

俺は財布をポケットに入れて浴室やへを出た。

「どこに行くの？」

玄関へ向かう途中、母親が尋ねてきた。

「ちょっと散歩。」

それだけ告げて家を出た。

外は涼しかった。

さすが5月、この寒すぎない涼しさが妙に心地いい。  
いいね、やっぱり夜はキモチー…

そのとき、俺の目に人影が映った。

50mくらい先、電灯の下を誰かが走っている。

……あれは……飯田！？

……飯田！？

電灯の下を走り抜けて行つたのは裏生徒会執行部の飯田だった。

何で飯田が？

そう思つたが、どうもあの形相は尋常じやない。  
おそらく何かあつたんだ。

……よし、後をつけよう。

俺は全速力でいいだの後を追つた。

飯田は全速力で走つていた。

高見と矢崎は学校だ！

赤西さんに連絡した後、一応高見の家にも連絡を入れた。  
結果、高見は家に帰つていなかつた。

ということは、まだ高見は学校にいる事になる。

時計を見た。

7：40。

もう下校時間から数時間が過ぎていて  
頼む、間に合つてくれ。

やつと学校が見えてきた。

## 第7話（後書き）

次回：果たして高見は無事なのか？

高見は目を覚ました。

夜？ だらうか。

時計を見ると、すでに8時前。

窓から見える外の景色は真つ暗な闇だけ。

痛ッ！

起きあがらうとした高見の頭に激痛が走る。  
手を後頭部に回すと大きく腫れ上がり血が出ていた。

… そうだ、俺、矢崎にやられたのか。

そのとち、となりの音楽室の電気がついた。  
だんだん足音が近づいてくる。

高見は手探りで辺りをかき回し、武器になるような物を探す。  
あつた。これは…譜面代か。

足音はどんどん近づいてくる。  
高見は譜面代を構えた。

と、準備室のドアが勢いよく開いた。

それと同時に高見は勢いよく譜面代を振り下ろした。

ガシャン！

譜面代が床におもいつきりぶつかつた。

チツ、はずしたか。

高見はもう一度譜面代を構えなおし、振り上げる。  
くそ矢崎！死ねえ！

「待て待て。俺だ、赤西だ。」

高見が譜面代を振り下ろそうとした瞬間、聞き覚えのある声が響いた。

え？ 赤西さん？

田の前には赤西が立っていた。

高見は譜面代をおろした。

赤西さん？ 何でここに？

「とにかく逃げるぞ！ 話は後だ。」

「よし。逃げましよ。」

高見はそう言つて立ち上がつた。  
が、またもや後頭部に激痛。  
膝をついてしまつた。

「オイ、だいじょぶか？」

赤西が心配そうに高見の顔をのぞき込んだ。

「…、立てねえ…

すると廊下から人の歩く足音が聞こえてきた。

コツ、コツ、コツ、コツ

一瞬で赤西の表情が険しくなった。

この足音の主は矢崎。

何となくだが、分かる。

じにく向かってきているのは、矢崎。

音楽室の電気はついたままだ。

これでは見つかる。

「隠れるぞ。」

赤西はそつ合図して、高見を引っ張り、楽器が置いてある所の裏に隠れた。

足音はどんどん大きくなつてくる。

そしてその足音は音楽室のドアの前で止まつた。  
少し間をおいてドアがゆっくりと静かに開く。

「…隠れても無駄だ。出でこい。」

矢崎の声。もう見つかってる?

赤西は楽器の影から矢崎を見た。

矢崎は周りを警戒しながら準備室の方へ歩いていく。

まだ見つかってはいないか。

よし…こうなつたら…

「いじでじつとしてる。分かつたな？」

赤西はいきなり高見にそう告げて、隠れている楽器の裏から飛び出した。

「いじだー矢崎！」

赤西は大きく叫び、廊下へ走る。

矢崎はその声に気付き、廊下側に視線を移す。

赤西さん…ケガして走れない俺のために陽動を？  
そうやってアンタはいつも人をかばう。

前にもこんな事があつた。

それが裏生徒会執行部に入るきっかけになつた。  
赤西はいつも真っ直ぐだ。

矢崎は携帯をとりだした。

素早く誰かに電話をかけた。

「俺だ、矢崎だ。どうやら邪魔が入つたようだ。先回りして始末しろ。」

それだけ言つと矢崎は赤西の後を追つて走つていつた。

矢崎が出て行つたのを見計らつて高見は物陰からでた。

大変だ。矢崎<sup>ヤツ</sup>には仲間がいたんだ！

高見も赤西と矢崎の後を追おうとした。

そのとき、音楽室の正面の廊下から懐中電灯の光が見えた。

はつ！

身を隠そうとしたときにはもう遅かった。

懐中電灯はきつちりと高見をとらえていた。

……クソッ！ 今日はなんて運が悪いんだ！？

加山は自分の通っている中学校、東浜中学校の校門の前に立っていた。

先に走つていった飯田<sup>メガネ</sup>の後を追つてここまできた。飯田<sup>メガネ</sup>の慌て方からして学校で何かあつたのだろう。ここまで追つてきただけの事件<sup>じけん</sup>はありそうだ。もしかしたらおもしろいモノが見られるかもしれない。

そんな期待を胸に、加山は校門から敷地内に入った。

怪しまれるから飯田には気付かれないよ<sup>う</sup>りにしないと…いろいろ説明すんのメンドいしな。

それに見つかつたら、まるで俺がストーカーみたいに思われちまつ。

…とその時、

「加山！何でいるんだ！？」

え…

靴箱の前に飯田が立つていた。

飯田は真つ直ぐ加山をとらえていた。

…さつそく見つかっちまつた…

じょうがない。

加山は何で学校<sup>じゅうがっ</sup>にいるのかをすべて話した。

加山と飯田は一緒に廊下を歩いていた。

飯田の話だと…前半の部分は難しくて理解できなかつたが、まあ高見が危ないらしいことは分かつた。

まあ高見を助けたいとは思わないが、矢崎のやつも気にくわない。仕方ない、矢崎をたおすという理由の元で出向いてやるか。

しかし暗いな。

懐中電灯があるからかるうじて足下くらいは見える。  
懐中電灯コレがなかつたら危なつかしくて歩けない。

「不気味だな…」

飯田がそんなことをつぶやいている。

確かに昼間と違つて夜の学校は不気味だ。

いつもより廊下が長く感じられる。  
飯田コイツがいなければ普通に歩いてなどいられないだろう。

ホントに高見はまだこの校舎にいるのだろうか。

人気がない、静かすぎる。

……ガツシャーン！

突然、静寂を破り何かが床にぶち当たる音がした。

「なんだ！？この音！？」

急に恐怖がわいてきた。

突然の衝撃音。

突然すぎたその音は、俺の恐怖心をあおりたてた。

コワイ。

コワイ、コワイ、コワイ。

「上だ！行つてみよう。」

飯田が冷静に言った。

しうがない。行くしかなさそうだ。

二人は一番近い階段までダッシュした。

3階。

飯田と加山は慎重に階段をのぼつていた。

音の方角と大きさからして、あの音は3階から聞こえた。つまり、近くに矢崎てきがいてもおかしくない。

慎重に…慎重に…

階段をのぼりきつたところで、辺りを懐中電灯で照らす。

!!

音楽室の電気がついている。  
誰かいるのか！？

そしてドアの前には人影がある。

誰だ？暗くてよく見えない。

その人影を懐中電灯で照らす。  
灯りを足からどんどん上に移す。

「た、高見！？」

加山と飯田は声をそろえて言葉を口にしていた。

そこに立っていたのは高見裕也、自分たちが救出しにきた本人だつた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2077e/>

---

裏生徒会執行部！！

2010年10月14日13時57分発行